

亀田鵬齋の北越来遊に見る 越後文人との関わり

程 建 敏

Abstract

This paper mainly discusses the relationships between Bosai Kameda (1752~1826) and Echigo's literati by analyzing two works written by Bosai during his visit to Hoketsu.

The first work is a landscape painting with Chinese poems written by Bosai. Through the analysis of these Chinese poems, it is determined that the theme of this painting is Yahiko Shrine which is called Echigo Ichinomiya. And by tracing back to the writing background of this work, it clarifies a part of Bosai's literary exchange activities in Echigo.

The second work is a travel note written by Bosai passing by Oidaira Village. It is also the last work before he left Hoketsu. Through the introduction of the Hosaka clan mentioned in the travel note, it becomes clear that the cultured people in the village play an important role in the interrelation between the central culture and Echigo's culture.

キーワード……亀田鵬齋 北越来遊 石川侃齋 大井平瀑布記

一、はじめに

亀田鵬齋(かめだほうさい)一七五二(一八二六)は江戸神田に生まれ、名は翼、のち長興(略して興)に改名した。通称は文左衛門、号は鵬齋。また善身堂などである。早くに六歳で書を三井親和(しんわ)に、そして漢学を町内の飯塚肥山に習い、十四歳で井上金峨(きんが)(一七三二~一七八四)のもとで儒学を修めたという。当時日本の儒学界は、朱子学派・陽明学派・古学派など百家争鳴の観を呈し、各派間の論争が激しかった。師の金峨は「凡學問之道、在乎自得、猶良工之攻木、取其可者而用之、不可者棄之、古之教人、各由性成徳、何必欲其徒之類我乎(凡そ学問の道は、自ら得るに在り。なお良工の木を攻るがごとし。その可なるものを取り用い、不可なるものは之を棄つ。古人の教えは、各おのの性に由りて徳を成す、何んぞ必ずしもその徒の我に類するものを欲せんや)」⁽¹⁾と先行諸学説に偏らず、その長所のみを取り入れる折衷学を主張していた。

師の折衷学を継いだ鵬齋は、安永三年(一七七四)二十三歳の時に、赤坂の日枝神社近くに塾を開き、のちに小石川諏訪町や神田駿河台などへ転居した。その私塾は、多くの旗本や御家人の子弟が入門し、盛況ぶりを呈した。しかし、「寛政異学の禁」(一七九〇)により、幕府の正学が朱子学に統一され、鵬齋たちの学問が禁止されたため、塾生も急激に減ってしまった。世に志を成し

得なかった鵬斎は、寛政九年(一七九七)に塾を閉じて出村(現東京墨田区)へ移り、また五十歳頃より各地に旅に出ることが多くなった。

文化五年(一八〇八)、佐渡の門人・矢島主計は郷里で子弟を教育するための講堂を建てることを試み、師の鵬斎に助勢を願う書簡を出したようである。それに対して鵬斎は、「此度之華翰来論二、佐州講堂を建て一郷教育の思立、実以、文運之代、辺郷ニ至る迄名教の行レ候事、於僕大悦無計候……且又其地講堂出来時分にもなり、一つ教育可致存候」(2)と快諾の返信をよこした。江戸で活躍できなくなった鵬斎は以後、酒を愛して放浪の人生を過ごしていたともいわれるが、この書簡からは、彼がまだ学問を広めようとする情熱を失っていなかったことが察せられる。

矢島氏の誘いに心が動いた鵬斎は、その翌年に江戸を離れ、北国遊行を始めた結果、文化六年九月から文化八年七月まで、佐渡での百日余りを含め、越後で約三年間を過ごした。越後路を巡った鵬斎は、各地の旧家や文人の招きにに応じて多くの作品を残している。本稿では、それらの作品のうちいくつかを解説すること、鵬斎と越後文人との具体的な関わりを窺いたい。

二、石川侃齋山水画 亀田鵬斎賛

(一) 先行研究における両者の合作

石川侃齋(一七六四〜一八四〇)は、古町(現新潟市)に生まれた南画家である。名は元輅、字を公乗、通称龍助。侃齋と号し、別に二橋外史・信天翁なども用いた。幼い頃から絵を好み、大坂で木村兼葭堂(一七三六〜一八〇二)に画法を受けたという。『新潟富史』(一八八九刊)に収録される「侃齋先生墓誌銘」に、「會鵬齋雲泉二翁游新斥、乃問文於鵬翁(會々鵬齋、雲泉二翁新斥に遊ぶ。乃ち文を鵬齋に問ひ)」(3)と、侃齋が新潟にやってきた鵬斎に学問を問うたことを記している。また、『侃齋遺芳』(4)の中には師事した鵬斎との合作二点が、さらに『新潟県文人研究』第十三号(5)の中には両者の合作一点が紹介されている。まずそれらの文献に載っている作品について若干触れておく。

『侃齋遺芳』収録作だが、侃齋が山水図を描く条幅作で、署名は「侃齋輅寫」と入っている。米点山水という当時の南画の基本的手法を用いている。左上に鵬斎が「高臥秀青山、塵土不驚幽夢、忘情消白日、乾坤自有閑人(高臥 青山秀づ、塵土 幽夢に驚かず。忘情 白日を消して、乾坤 自ずから閑人有り)」と賛を施している。

二作目は紙面の中央に侃齋が菊を描いたもので、署名は「侃齋寫意」と入れている。やはり左上に鵬斎が「共愛鮮明醉秋色、争教狼藉臥疏烟(共愛鮮明 秋色に酔い、争教狼藉 疎烟に臥す。)」と賛を加えている。なお、この詩の出典は中国金代・元好問(一一九〇〜一二五七)の詩作「野菊座主閑閑公命作」(6)にあり、原詩の「共愛鮮明照秋色、争教狼藉臥疏烟」とは若干字句の異同

がある。

以上二作ともに出典文献が白黒印刷によるため、着色の有無は不明だが、描写は簡潔で後年の作に見る侃齋の画風が窺える。鵬齋の書だが、前作がやや行書を含み、後作は越後路作でよく見る楷行体と称すべき謹直な書きぶりである。

次に、『新潟県文人研究』第十三号収録作の方は、淡彩を用いた侃齋の山水画の右上に、鵬齋が「内浦外灣紅蓼秋（渚）、大江小汊白蘋洲、天外餘霞未全斂、獨釣寒江落日秋（内浦外灣 紅蓼の秋、大江小汊 白蘋の洲。天外餘霞 未だ全斂せず、獨釣寒江 落日の秋）」と賛をした作である。本作の「侃齋」署名は、他作に見ない丸味を帯びた行書を用いている。前掲合作と異なり、原物が確認できるので、図一に掲出した。

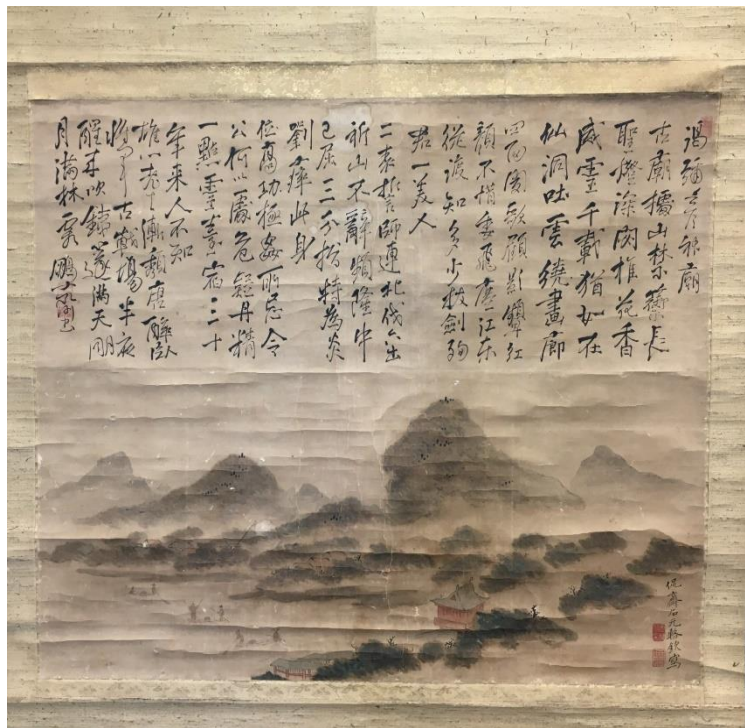
図一 「侃齋画 鵬齋賛七言絶句」 新潟市個人蔵



続いて本稿では、以上の三作とは別に新出の注目すべき両者の合作一点を掲出する（図二）。

(二) 新出合作の概要

図二 「侃齋着色画 鵬齋賛五詩」 新潟市個人蔵



紙本縦 85.5 cm × 横 96 cm からなる、比較的大幅である。仔細に見ると、一枚漉きではなく、鵬齋の詩書と下方の侃齋の画は別々の紙に制作されている。当時としてはこれだけの幅と高さをもつ大きさの一枚漉きは、入手が難しかったであろうから、このように別々の紙に揮毫したと思われる。紙質については同じものを用い

ている。

まず鵬斎の詩書(43 cm×横96 cm)だが、後年の草書体ではなく、越後路の筆跡に見る直線的な楷書の表現に、時折点画が続けられた独特の楷行体になっている。岡村浩『亀田鵬斎総集』(二〇〇七刊)には、文化六年から文化八年までに県下で認めた五十余作が収録されているが、本作はそれらと比べて近似した書きぶり、来越時の筆であることはほぼ間違いない。それほど鵬斎の場合、越後路と江戸に帰って以降の書風には、大きな相違があるのである。

次に、下方の侃齋画(42.5 cm×横96 cm)を見てみる。画面右下に朱色の建物を描き、その瓦は反り返っていて、中国様式の神社・仏閣のように見え、左下には、本殿に続く長い回廊と思われるものが描かれている。また、回廊の前方には漁の際中の三艘の小舟を描く。人物の顔や漁を行う仕草はほかの侃齋作にもよく見える描きぶりで、生涯を通して舟江(新潟)で暮らした侃齋はこの漁師図をもつばら得意とした。ただし、全体の色調が侃齋の作品にしては重々しく、やや暗い感じがする。右下の署名を見ると、「侃齋石元輅欽寫」と記入している。「石川」の姓を「石」一字にして、その下に「元輅」と本名を記すのは、中国文人に倣った習慣で他作にもよく見られる。名前の後ろに「欽寫」とあるのは、江戸の大儒者と寄せ書きする心境と、画題、即ち特別な神社を描いていることにちなんだ署名と推定したい。「欽」字は「謹」と同義で、改まった気持ちで筆を取った意味をもつ。

なお、制作年の判明する他作の署名例を文末に付録するが、全体的に多くのパターンを不規則に用いていることが分かる。よって、署名の記入例から制作年を推定することは難しい。

一方、越後路の鵬斎作の多くには、制作年が記入されているのだが、残念ながら本作にはそれが見えない。恐らくは五首の漢詩を書くに当たり、用意された本紙上署名部分の余白を失ったことに原因があろう。侃齋作にも制作年が入っていないため、本作の制作年及び両者の面会がいつ行われたかに関しては特定できない。ただし、侃齋作を調査するうえで一つの区切りになるのが、壮年期及び江戸に遊学して谷文晁(一七六三―一八四一)などの文人と出会って帰郷するまでと、それ以降とに分ける尺度である。侃齋の遊学について、『舟江遺芳録』(一九九二刊)所収「石川侃齋」項に「弱冠にして京師に遊び、古迹を探り文人を訪ひ、大坂に寓し、木村巽齋と交り好し、遂に西、長崎を窮め、東江戸に出でて歸る」(7)と記述している。侃齋と谷文晁との邂逅についてはつきりしていないが、『侃齋遺芳』には、「一代の巨匠谷文晁は翁の凡ならざる技倆を惜し屢々書を寄せて江戸に来往せん事を促した」(8)と二人の交わりを書いている。鵬斎の書風とその来越時期から追究すれば、この侃齋画は文化六年以降に越後路で描いたものと見てよいであろう。

また、文化六年十月に鵬斎が水原(現阿賀野市)にいた門人の中村久右衛門へあてた書簡に「弥々御清勝賀奉候、然は老拙夏中より信州遊行、早速当国へ可罷越存候処、途中滞留いたし候、漸

本月二十四日に新斥へ着いたし候、当年者此地に而越年可致と存候」(9)と、年末を新潟で過ごすつもりであることを記している。或いはこの時に侃齋と出会って知り合いになったのであろうか。続いて、鵬齋が記した賛（七言絶句五首）の分析を通して、さらに寄せ書きの内容を掘り上げてみたい。

〈一首目〉

「謁彌彦独廟 彌彦独廟に謁す」
 古廟據山禁禦長 古廟山に據りて 禁禦長く
 聖燈深閤椎花香 聖燈深く閤して 椎花香る
 威靈千載猶如在 威靈千載 猶在すが如く
 仙洞吐雲繞畫廊 仙洞雲を吐き 畫廊を繞る

古廟は山に寄り沿い、みやしろのかこいは長く伸びている。聖燈は奥深い所に閉ざされ、椎花の香りだけが漂う。弥彦の神は千年を経つてもまだそこにおられるかのごとく、仙人の住む洞から流れ出た雲が絵のような渡殿わたののをめぐりゆらゆらとしている。

本詩は越後の弥彦山にある神社を綴った作である。江戸時代における越後の二大奇書の一つとされる『北越雪譜』の中には、「此山さのみ高山にもあらざれども、越後の海浜八十里の中ほどに独立して山脈いづれの山へもつゞかず。右に国上山、左に角田山を提攜して一国の諸山是れに対して拱揖するが如く、いづれの山よ

りも見えて実には越後の鎮ともなるべき山は是よりほかにはあらじとおもはる」(10)と弥彦山を越後鎮守の山と称している。そこに建つ弥彦神社は越後一宮といわれる。

〈二首目〉

四面聞歌顧影 四面の歌を聞きて 影を顧みて顰む
 紅顔不惜委飛塵 紅顔惜しまず 飛塵に委ねるを
 江東従渡知多少 江東より従い渡るもの 知んぬ多少ぞ
 抜劍殉君一美人 劍を抜きて君に殉ずるは 一の美人

四面の楚歌を聞いて、自分の姿を哀れみ眉を顰めるが、その美しい姿が消え去ることもおしまない。江東から付き従ったものは、どれほどいたであろうか。いま、劍を抜き、君とともに死ぬのは、ただ一人の美人だけしかない。

本詩は中国の漢詩「虞美人」(11)を引用するものである。虞美人とは、秦末に漢の高祖・劉邦と天下を争った楚王・項羽の愛姫で、虞姫ともいう。紀元前二〇二年、項羽は垓下がいか（現安徽省宿州市）で漢軍に包囲され、虞姫は頸部を切つて自ら命を絶つたのである。

〈三首目〉

二表誓師連北伐 二表師を誓ひ 連りに北伐す

六出祁山不辭頻　六たび祁山きざんに出で　頻いとを辞いとわず
隆中已屈三分指　隆中りゅうちゅう已にに　三分の指を屈し
特為炎劉瘁山身　特に炎劉えんりゅうの為　山身つかを瘁つかれさす

前、後二度出師すいしの表を主君の劉禪（劉備の子）に奉って戦いのぞむと師誓を行い、たてつづけに魏を北伐する。苦勞をいとわず、六度にわたって祁山に出陣した。隆中の地では既に「天下三分の計」を示し、さらに蜀漢王朝のために命を尽くしてとうとう出陣の山中に客死したのである。

本詩は中国三国時代、蜀の忠臣・諸葛孔明しよかくこうめいを褒め称える作である。隆中（現湖北省襄陽市）で晴耕雨読の日を送っていた孔明は、蜀の劉備に軍師として迎えられ、「天下三分の計」を披露した。二三年、劉備が死去して子の劉禪が即位した。先帝の遺志を受け、た孔明は、二二七年と二二八年、後主劉禪に「出師表」と「後出師表」を奉り、宿敵の魏を討伐するにあたって悲痛な決意を表した。六度折山より魏を攻め、陣中で亡くなったたという。

〈四首目〉

位高功極姦所忌　位高く功極まりて　姦かんの忌いむ所となる
令公何以処危疑　令公何を以てか　危疑きぎに処する
丹精一點靈台宿　丹精一點せば　靈台れいだい宿る
三十年來人不知　三十年來　人知らず

地位が高く、貢獻度が大きくなるほど奸臣に妬まれる。令公（楊業）はどうやって危疑に対処するのだろうか。その丹精をこめた心は、三十年間も人に知られていないままである。

本詩は北宋の武將・令公（楊業）を賞賛する詩作と推定する。楊業は初めは北漢国に仕えたが、その腐敗を見限ってのちに宋の太宗に降り、將軍の地位を与えられた。戦術に優れ勇壯無比であったことから「楊無敵」と称され、北方の遊牧民族・契丹きったんが建てた遼が南下して北宋を脅かすと、防衛に活躍した。九八六年、遼軍との戦いに赴いた楊業は、彼の名声を妬んだ武將・潘美はんびたちの謀略によって勝ち目のない戦を強いられ、孤立無援に陥る。ついに捕虜ほりよとなったが、屈服を拒み、食を絶って亡くなったという。死後大師・中書令ちゆうしゆれいを贈られたことにちなみ、楊令公と呼ばれる。

〈五首目〉

雄心老去漸頽唐　雄心ゆうしん老い去りて　漸ようやく頽唐たいちゆうたり
醉臥將軍古戰場　醉臥すいす將軍　古戰場
半夜醒來吹鉄笛　半夜はんや醒め来りて　鉄笛を吹く
滿天明月滿林霜　滿天まんてんの明月　滿林まんりんの霜

若かりし頃の雄心も、年を取って衰えてしまった。將軍は酔って古戦場に倒れ臥すばかり。夜半に起きて鉄笛を吹いてみたが、明月は空を照らし、林には霜が満ちる光景が広がる。

本詩は中国清代の著名な学者・紀昀きいんの『閩微草堂筆記』⁽¹²⁾によるものである。紀昀はかつて新疆に流された時に、そこには毛功加もうこうかという副將軍がいた。少年の頃から雄大な志をもち従軍した毛功加は、何度も戦功を立ったが、目上の人に認められず、失意の生涯を送っていた。紀昀は彼の話聞き、感慨を込めてこの漢詩を吟詠したのである。

一見すると二首目から詩題が征戦に変わり、一首目に吟詠した弥彦独廟と無関係のようだが、二首目を以降を分析してみると、実は鵬齋は弥彦神社に関わる伝説を思いながら賛をしたことが分かる。

弥彦神社の祭神は天香山命あめのかみやまのみことであり、天照大神あまてらすおほみかみの曾孫ひこ孫にあたるという。天香山命は、天孫降臨あももに供奉くぐぶして天降あももられ、紀州(現和歌山県)熊野に住まわれた。

伝説では神武天皇が東征する際、賊軍のために進軍できずに苦しみ悩む姿を見知ることになる。そこで天香山命は、天照大神から霊夢を受け、劔ふつのみたまのつるぎを天皇に奉った。その劔の威力によって神武天皇は敵を撃破して、次々と蛮賊を平定した。

大功を立てた天香山命は、のちに越の国平定の勅を奉じて日本の海を荒海を乗り越え、米水浦(現長岡市野積)に上陸した。そして弥彦山の東麓に宮居し、付近一帯を鎮撫し、住民に漁業・制塩・農耕・酒造などの技術を授けて越後の国づくりを尽くしたという⁽¹³⁾。

鵬齋が項羽や孔明など中国歴史上の名将と軍師に関する詩を題

したのは、恐らく神武天皇を加勢した弥彦神社の天香山命を、彼らと匹敵するぐらいの英雄と見立てて中国の漢詩を引用してその武功を称えようとしたのであろう。

また、毛功加のような失意の英雄像を描く漢詩を賛したのは、「寛政異学の禁」によって抑圧され、地方に流浪する自らの境遇への感慨もあったと考えられる。

これらの漢詩の引用から、鵬齋は中国の古典と書物に詳しいことも窺える。

(三) 新出合作の制作背景の分析

以上のように、鵬齋の漢詩の主題は弥彦神社を尊崇したものと分かる。ゆえに侃齋が描いたのも、弥彦神社周辺の風景であろうと推定できる。先に中国様式の神社・仏閣のように映ると説明したが、この侃齋の生きた時代の画家のほとんどが中国の絵画を下絵に用いていた習慣上、このような趣に仕上げたと見る。一方、山波の手前のほとんどが湖または河川の状況に描かれていたが、先述の『北越雪譜』に「海浜八十里の中ほどに独立し」と記すように、当時の神社の周辺には何も遮るものがなく、海浜を目の当たりにできたと思われる。従って侃齋が海に浮かぶような形で弥彦神社のやしろを描いていたのは、加工も含まれようが実景に基づき制作した光景と推定したい。

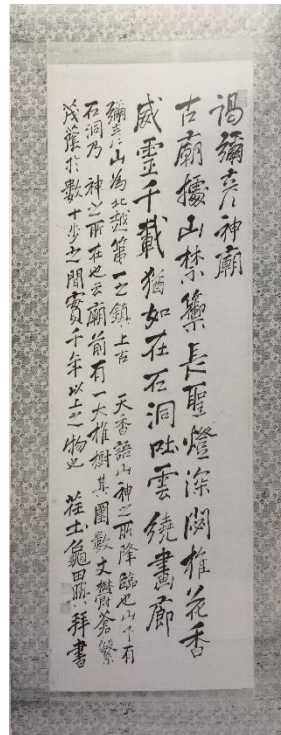
『続日本後紀』や『万葉集』、『延喜式』などの書物に登場する

弥彦神社は、以後近世においても文人墨客の心を惹きつけていた。例えば、曾良の旅日記の元禄二年（一六八九）七月三日の項に「申ノ下刻、弥彦ニ着ス。宿取テ、明神へ参詣」（14）と、松尾芭蕉が弥彦神社を訪ねたことを記している。また、谷川敏朗『良寛の生涯』には、良寛の和歌において「弥彦神社に関するものだけでも、全作歌の一パーセントに近い十二首を作っている」（15）と記している。文人の嗜好の地、関心をそその対象として、往來のルートの要も当地は担っていた。

文化七年、北越にやってきた鵬齋も新潟を発ち弥彦に向かった。『彌彦神社舍人家文書』における「文化七年日用記 光弘」二月十四日条に「神主宅江、江戸表儒者先生ほうさへと申人止宿被致、暫ク被居候由二候、只今日本一之人と申事二候」（16）と、鵬齋が弥彦に逗留したことを記している。関連して『続弥彦神領史話』には「神主高橋家に何日位滞在したか明らかではないが、彌彦神社参拝の『謁彌彦神廟』と『彌彦神祠』を作っている」（17）と述べている。幸い、鵬齋が新潟生まれの画家・五十嵐浚明の孫である五十嵐泰庵へあてた書簡（二月十九日付）に「先日者遠路之処蒙尋問辱奉謝候 帰路奈何案し申事二候 老拙も十八日二八彦出立いたし寺泊に着致し無異罷在候」（18）と、弥彦を離れた日付を「二月十八日」と記しており、およそ六日ほど滞在したことが判明する。また、「八彦の祠に詣ふて、ぬかつくや音沙汰なしの雪おろし」（19）と、鵬齋署名の弥彦を訪ねた俳諧短冊を残すことも確認できる。

高橋家に滞在中、鵬齋が揮毫した「謁彌彦神廟」はその後軸装され今も残っている（20）。掲図して内容を鑑賞してみる（図三）。

図三 「高橋家伝来作」『亀田鵬齋総集』より転載



本文は侃齋の山水画に題した「謁彌彦独廟」と同じであるが、文末には「彌彦山為北越第一之鎮、上古天香語山神之所降臨也、山下有石洞、乃神之所在也云、廟前有一大椎樹、其圍數丈、鬱蒼繁茂於數十步之間、實數千年以上之物也、荏土龜田興拜書（彌彦山は北越第一の鎮と為す。上古、天香語山命の降臨する所なり。山下に古洞ありて、命の居りし所という。廟前に一大椎樹あり、その圍數丈、鬱蒼として繁茂し數百歩の間蔭とす。実に千年以上の古木なり）」（21）と、古蹟を訪れた際の概観が綴ってある。

この弥彦神社参拝より少し前、鵬齋は新潟を立ち、松野尾村（旧巻町）の岩崎氏の宅に立ち寄っていた。杉村英治『亀田鵬齋』によると、岩崎家には鵬齋が題記した「山茶之亭」の扁額が残っていた。「山茶」とは椿の花を指す。また、同村の神明社（現新潟市

西蒲区松野尾若宮神社)の裏には、鵬齋の漢詩「謁八彦山廟」が刻まれた「弥彦宮遙拝所」と題額をもつ碑が建っている(図四)。碑文の内容は、高橋家が所蔵する作品とほぼ同じだが、別作の詩書である。高橋家伝来作と若干異なるのは、漢詩の題名を「謁八彦山廟」として、その題が作詩の文末に刻まれている。続いて、高橋家伝来作と同じ長文款記を追記し、文末には「文化七年庚午春二月 荏土鵬齋興」の署名が見える。この文末の年月日は高橋家伝来作には付記していない。従って総合してみると、本詩は来越二年目の二月中にはまとめられたものであることが、建碑の署名から明らかになる。さらにこのことから、前述した新出の合作の制作背景も一言添えることができるようになった。即ち、鵬齋五詩の冒頭に本詩があるのだから、この作もおよそ文化七年二月初後のころに行われたと思われる。

図四 「野尾若宮神社碑文 拓本」『亀田鵬齋総集』より転載



なお碑文の末尾に、「教職権小教正小出八雄人君敬神之士也、曾為松尾神社支局長、今茲齡方環曆君常尊崇弥彦大神、家有鵬齋此詩、刻之建以為其遺拝所、明治二十八年四月正七位松田秀次郎藏」⁽²²⁾と建碑者の跋文を追刻している。文中に名の挙がる小出、松田氏ともに付近の名士⁽²³⁾で、碑文の原蹟が小出家に伝わっていたことがこの追刻によって窺える。

また、岡村浩「亀田鵬齋——諸芸をよくした文人——」⁽²⁴⁾によると、白根市(現新潟市南区)個人蔵の屏風一扇にも、同じ詩を書いている。要するに侃齋との合作を含め、鵬齋の「謁彌彦独廟」の詩は少なくとも四人に揮毫を求められた。

早川清作『星霜雜記』(一九二七刊)では、新潟町の風雅の流行について、「文化の末ころ、俳諧や発句などを嗜む人を、風雅を好む人といった。その以前に画人の鈿雲泉や、詩人の亀田鵬齋などが来遊したことがあったが、そのころまでは、画や詩を書いてもらう人はほとんどなかった」⁽²⁵⁾と記述している。本稿で紹介したように、北越来遊時の鵬齋は、新潟の名所・弥彦神社を巡り、地元の画家や逗留先の知識人と画賛や詩作の交わりを行う形で、江戸文人の風雅を旅先で伝播し、越後における文人同士の交流に新しい刺激を与えたといえよう。

結果、侃齋のような地方出身の画家も、文芸の全国的水準を知り、次第に越後の文壇史に顕彰される一人に数えられるほどの力量を有するようになった。

三、大井平瀑布記

(一) 越後路最後の作

弥彦から離れた鵬齋は、その後回り回って旅の目的地だった佐渡にわたり、百日あまり滞在した。その間、門人矢島が開いた学館「励風館」を応援して儒学の講義なども行った。文化七年七月再び越後に戻り、十月には新津の素封家・桂家で、年末には燕の大地主・神保家で過ごした。その後、信濃川にそって小千谷・十日町と移り、大井平村（現津南町）の保坂家に身を寄せ、「大井平瀑布記」⁽²⁶⁾を作った。鵬齋の北越来遊の最後の地で作った作品として注目したい。まず、その内容を次に記してみよう。

「越之大井平村在妻在山中、其村長曰保板子潤、都下文人騷客游於越者、皆以子潤為北道主人、余北遊之次亦訪之、村落僅數十家、瀕千曲川而居焉、其家叠複連接、亘於信裏之地、其深邃不可窮極矣、村之南有瀑布、從絶頂而下、遠望之則如懸白練、欲至其下而觀之、迺躡丘傍澗而行者、數百步途窮而不能進、余前進而被叢薄攀巉巖而行、遂出于瀑布之右、山之半腹以樹木蒙鬱翳味而覆之、不能窮其全體矣、於是攘袂以攀枝、捫蘿囊裳、躡石涉水、體疲氣喘、流汗霑踵、猶勵力抖神進而不止、遂越絶壑而出其左、即藉棘踞石而視之、則正面相對而全體盡露矣、其山西南長走、頂平而碧天如截、瀑布縱其巔而直下、實如挾高如布、細者如縷、奔突如揉絮、噴薄如吐玉、或如白龍之倒掛、或如銀車之直迸、飛流互

追、深潭相激、其響如千磑之礪、其聲如迅雷之墜、清泉洗塵面、涼氣滌煩熱、頓覺心胷之爽快矣、終坐而觀之者既數刻、身冷神清而衣袂盡沾少焉、夕陽西沉、傍人促歸、於是賦一絶、題石而去、遂為之記以贈主人云 文化八年 昭陽協洽之 夏五月二十二日書 荏土 鵬齋興」

落款によれば、明らかに文化八年（一八一二）五月に、越後妻有山中の大井平村で書いた作品である。思い切って山にのぼる姿や瀑布の凄まじい勢いの描写から、鵬齋の豪快な文風が窺える。

一方、鵬齋を受け入れた保坂子潤は、大井平の庄屋で松園と号する保坂甚右衛門である。『北越詩話』補遺「保阪松園」の項に「松園名は信美、字は子潤。上郷村大井平の人。博学を以て稱せらる」⁽²⁷⁾と伝記が載る人物である。また、江戸時代に越後を旅した新楽郷右衛門の『閑叟雜録』に保坂甚右衛門のことを、「好学の男にて、よほど読めるものなり。つまり郷にての人物なりという。しかも豪富なり」⁽²⁸⁾と記している。同書によると、寛政詩学の四大家に数えられる柏木如亭（一七六三〜一八一九）も、かつて保坂家に滞在して半年ほど世話になった⁽²⁹⁾。

(二) 制作背景の分析

「都下の文人騷客は、越後に遊ぶ者であれば、皆子潤を北の主人と見なす」と鵬齋が瀑布記に書いたように、文芸を嗜み、経済力も豊かな保坂のような在村文化人は、上方や江戸文人の北越来

遊での受け皿の代表となっていた。前述した新津の桂家と燕の神保家も同じである。彼らは鵬齋を始めとする天下周遊の文人墨客をもてなし、詩書画を請うて厚い潤筆料を贈った。

「三年作客寄浪迹、六十曠唐如疇夕、主人愛我不惜錢、能使我縱意所適、有酒如川肉如山、一日一醉百日百、是以三年頻頻來、翻認君家為我宅、不知旅愁不知貧、總如歸家仍自得、今朝離筵別酒時、始覺三年身是客（三年 客となりて浪迹を寄す、六十 曠唐として疇昔の如し。主人 我を愛して錢を惜しまず、能く我が意の適く所を縦にせしむ。酒の有ること川の如く肉は山の如し、一日一醉 百日は百。是を以て三年 頻頻として來り、翻つて君が家を認めて我が宅となす。旅愁を知らず 貧を知らず、總ては家に帰りて なお自得するが如し。今朝の離筵 別酒の時、始めて覺ゆ 三年身は是れ客なりしを）」⁽³⁰⁾と、鵬齋が文化八年燕の神保家を離れる時に作ったこの漢詩も、越人が中央文人を厚遇した有様を見事に綴った内容である。「酒の有ること川の如く肉は山の如し」などは多少誇張された表現かもしれないが、主人は前後数代にわたり、県央の学識豊かな地主として、旧家の声誉を保ち続けたのは事実である。

四、終わりに

江戸時代の前・中期、越後では各地で新田開発が進み、北前船などの交易も活況を呈し、越後縮をはじめ特産物も増え、経済は空前の繁栄を遂げたという⁽³¹⁾。それを受け江戸後期にいたると、

学芸を重んじ、風雅を嗜む世相が醸成されていった。幕末の儒学者・寺門静軒（一七九六～一八六八）は『新潟富史』の中で、「越之新斥者北海之最大口也、聞八千八水合流走海、乃數百里間、人之往還、物之運輸皆舟之、依而天下之漕集焉、海外商帆亦足以接是所以其地華而劇、其人豪而雅、騷客游跡與船輻湊、亦文墨一大馬頭也（越の新斥は北海の最大口也。聞く、八千八水合流して海に走る。乃ち數百里間、人の往還、物の運輸皆舟之れ、依りて天下の漕集まる。海外の商帆も亦以て接するに足る。これ其の地華にして劇、其の人豪にして雅なる所以、騷客の游跡船と輻湊す、亦文墨の一大馬頭なり）」⁽³²⁾と、新潟を文墨の一大寄港地と称している。かつて鵬齋も、その墨客の中の一人として身を越後に投じたのだった。

総じて本稿では、鵬齋の北越来遊における数多い書画作の中で、「侃齋着彩画 鵬齋贊五詩」と「大井平瀑布記」の作の重要性を指摘した。

まず前作についての視点だが、その作品の大きさが珍しいほどの巨幅であることから、よほど特別な場面で揮毫がなされたと推察する。また、詩書画の内容から揮毫場所は新潟きつての祠廟・弥彦神社であると思われる。鵬齋のみならず、同時代の文人の旅の行程の一部にも入っていたことについて、他作と重ね合わせて指摘した。

一方、合作相手は港町新潟の生んだ数少ない文士・石川侃齋である。彼は壮年期に上方及び江戸方面で修学したのち、帰郷した。

鵬斎との合作はその来越の年月から察して文化六年から八年の間に限定される。このことから、侃齋は遅くともこの時期までには、新潟に戻ってきたと推定できる。本作は、のちに新潟を代表する画人と目されるようになる侃齋研究の点からも、帰郷当時の画風の内容を具体的に鑑賞できる対象として重視されよう。

次に「大井平瀑布記」の方だが、多彩な来遊文人の旅のルートはほぼ決まっておおり、それは今日では、意外に思われる地方山間部にまで及んでいた。詩の中に出てきた保坂氏の事蹟は、残念ながら今日では地元で拾遺しがたい。ただし、鵬斎時代から大正期の資料によれば、当時特別な富裕者が辺郷の地にも在村して、風流を愛玩していた様子が看取できる。保坂氏同様、前述の神保氏もまた、『北越詩話』を繙くと、鵬斎ばかりではなく、大窪詩佛・小島梅外などといった江戸後期の著名な文人が旅の杖をとどめていることが読める。

本作は度々述べてきたように越後路最後の作である。足掛け三年にわたる巡遊で培った鵬斎の書表現と詩文の形式の到達点が見て取れるであろう。

文化八年、六十歳で江戸に戻った鵬斎は、詩書画の名声が高まり、その作品は人々に競って揮毫を求められたという。「寛政異学の禁」によって江戸で不遇の日々を送った鵬斎は、越後で多くの文人と交流ができ、現在の我々の想像以上に地方の文壇で活躍して、地元の文人や旧家などと深い関係を結んだ。その一方、北越来遊をすることが、自らの文芸を昇華もさせるきっかけに繋がっ

たことを看過してはいけなだろう。

※付録

『新潟県文人研究』第十三号に収録されている侃齋画の署名例を以下に列挙する。

文化九年（四十九歳）の作：「侃齋」「侃齋元輅」。

文化十一年（五十一歳）の作：「侃齋輅」。

文化十二年（五十二歳）の作：「蒲郡元輅」「侃齋懶輅」。

文政六年（六十歳）の作：「侃齋」「侃齋道人」「信天窠主人」。

天保五年（七十一歳）の作：「侃齋老人」「信天老漁」。

天保六年（七十二歳）の作：「信天老漁」「信天漁隱」。

天保八年（七十四歳）の作：「侃齋懶輅」「侃齋石元輅」「石川元輅」。

天保九年（七十五歳）の作：「信天漁隱石元輅」「信天」「信天漁隱」。

「信天道者」。

天保十年（七十六歳）の作：「侃齋」「侃齋石元輅」。

天保十一年（七十七歳）の作：「侃齋石元輅」「信天漁隱」「侃齋石川元輅」。

略」。

※本稿の漢詩・漢文の書き下し文や現代語訳については、特別な説明がない限り、筆者によるものである。また、本稿では基本的に新字体で統一するが、引用文は旧字体である場合、そのまま旧字体にする。

〔注〕

- (1) 関儀一郎『日本儒林叢書』第八卷、鳳出版、一九七一年、「金鏡先生師弁」一〜二頁。訳文は杉村英治による。
- (2) 岡村浩『亀田鵬齋総集』小千谷亀田鵬齋展実行委員会、二〇〇七年、五二四〜五二五頁。
- (3) 寺門静軒『新潟富史』高橋活版所、一八八九年、二九頁。訳文は小林存による。
- (4) 幾野五朔『侃齋遺芳』新潟さきがけ社印刷所、一九二一年。
- (5) 越佐文人研究会、新潟大学大学院現代社会文化研究科『新潟県文人研究』第十三号、越佐文人研究会、二〇一〇年、四〇頁。
- (6) 元好問撰、施国祈注『元遺山詩集箋注』人民文学出版社、一九五八年、三五二頁。「閑閑」は当時翰林の座主・趙秉文の号である。
- (7) 風間正太郎『舟江遺芳録』新潟雪書房、一九九二年、三五頁。
- (8) (4)に同じ。一一頁。
- (9) 山本修之助『亀田鵬齋の越後人宛書簡』『越佐研究』第二十九集 新潟県人文研究会、一九七〇年、二四頁。
- (10) 鈴木牧之著、岡田武松校訂『北越雪譜』岩波書店、一九八五年、一七〇頁。
- (11) 不題撰人、徐振宗点校『続兒女英雄伝』北京師範大学出版社、一九九二年、一五四頁。第二十回「武備文修欽差馳誉 先難后易海盜投降」の節にこの詩作を収録しているが、初出は不明である。
- (12) 飯塚朗、今村与志雄訳『中国古典文学全集20』平凡社、一九五八年、二七五頁。漢詩の書き下し文はそのままに引用する。この漢

- 詩の制作背景について、原文は「私は新疆に配流されていたとき、上奏文、檄文の起稿におわれて暇がなく、とうとう詩を作らなかつた。一聯一句浮かぶことがあつても、すぐに忘れてしまったのである。ウルムチ雑詩百六十首は、みな帰京の途中、追憶して詠んだもので、そのとき作つたのではない。ある日毛功加副戎が、身の上話をして今昔の感にたえないようであつた。それで、ふと、絶句一首を詠んだ」と記している。
- (13) 彌彦神社編『彌彦神社』学生社、二〇〇三年、一三頁。
- (14) 松尾芭蕉『おくのほそ道』岩波書店、一九七九年、一一八頁。
- (15) 谷川敏朗『良寛の生涯』恒文社、一九八六年、一三八頁。
- (16) 國學院大學日本文化研究所が編集した彌彦神社文書のマイクロフィルムを参照した。
- (17) 岡眞須徳『続弥彦神領史話』弥彦村教育委員会、一九八九年、三四頁。
- (18) 世田谷区立郷土資料館『江戸の文人交友録 亀田鵬齋とその仲間たち ―渥美コレクションを中心に―』世田谷区立郷土資料館、八一頁。同書二二八頁によると、「この書簡の宛名にある五十嵐庵は、鵬齋が日頃から可愛がっていた画家・五十嵐竹沙の実弟である。日付のところには『二月十九日』とあるのみで、年記を欠く。しかし、文面に『老拙も十八日二八彦出立し寺泊に着いたし』とあることから、この書簡は、鵬齋が書簡同地に滞在していた文化七年の二月十九日に書かれた書簡であることが判明する。五十嵐家は、竹沙の祖父・俊明以来、画を生業とする家で、元誠・元敬・

竹沙・北汀・其遠らの優れた画家を輩出している。医者となって新潟の家を守った泰庵も画を能し、墨竹を得意としたという」と文人を輩出した系譜が読める。

(19) (18) に同じ。八〇頁。

(20) 岡眞須徳『続弥彦神領史話』弥彦村教育委員会、一九八九年、三三四頁。

(21) 書き下し文は杉村英治による。

(22) 岡村浩「亀田鵬斎——諸芸をよくした文人——」『新潟大学教育人間科学部紀要』第三巻 第一号、二〇〇〇年、一九三頁。

(23) 栗原九十九編『西蒲原郡志補遺人物篇』市川吉五郎、一九八一年一三頁「小出蕙斎」の項、二〇頁「松田秀次郎」の項を参照。

(24) (22) に同じ。

(25) 新潟市史編さん近世史部会『新潟市史 通史編2 近世(下)』新潟市、一九九七年、四七四頁。

(26) 新潟市歴史博物館『新潟・文人去来——江戸時代の絵画をたのしむ——』新潟市歴史博物館、二〇〇七年、七六～七七頁。

(27) 阪口五峰『北越詩話』補遺、国書刊行会、一九九〇年、一〇頁。

(28) 田中一郎『越後いろざと奇聞』新潟日報事業社、二〇〇五年、二〇八頁。

(29) (28) に同じ。

(30) 杉村英治『亀田鵬斎詩文・書画集』三樹書房、一九八二年、一七二頁。書き下し文も杉村英治による。

(31) (26) に同じ。一一六頁。

(32) (3) に同じ。二六頁。訳文は小林存による。

主指導教員(岡村浩教授)、副指導教員(廣部俊也准教授・土屋太祐准教授)